

2021年2月7日 聖餐式説教

主イエスの本拠地カファルナウムの会堂で教えを宣べ伝えられ、悪霊を追い出された主イエスは、会堂を出てシモンとアンデレの家に入られました。このシモンは後に主イエスからペトロという名をつけられた人でこちらの名前のほうが親しまれています。ペトロとは岩という意味です。

漁師であったシモンとアンデレの兄弟は、湖のすぐ近くに家を持っていましたが、それは主イエスが教えを宣べ伝えられた会堂のすぐ隣にありました。同じく漁師でシモン・アンデレと一緒に主イエスの弟子となったヤコブ・ヨハネの兄弟もまた同じ町の住人だったのです。

ペトロの家ではしゅうとめが熱を出して寝ていました。カファルナウムのあるガリラヤ地方には熱を伴う風土病があり、現在もこの病気はあるのだそうです。ここでまず重要なのは、主イエスに家族に病人がいるということを隠さずに打ち明けたということです。

病人がいることを他人には話しにくいものです。医学の発達していなかった当時、家族に病人がいることが知られば、近所のお付き合いに影響することは珍しくありませんでしたし、病人のいる家の人間ということで差別的な目で見られることもありました。人々が病人のことを主イエスに話したのは、ペトロにとって冒険とも言えることだったのです。主イエスとの出会いは、自らのすべてを打ち明けることから始まったのでした。

主イエスはそばに行って起こされると熱が去り、病気が癒されました。主イエスの奇跡がもたらされたのです。次に重要なことは、癒されたこの女性が一同をもてなしたということです。病が癒され、健康を取り戻したこの女性は、その恵みを、もてなすことで現しました。自分の上に起こった喜びを、主なる神への感謝を自分の行動を持って示したのでした。

この様子を見た人々は、病人を次々に連れてきて癒しを願いました。病気は自らの罪の結果、子供の病気の場合は両親の罪の結果と考えられていたので、その罪を償うことなくして病気が癒されることはないと考えられていたのです。しかし主イエスは何の代償も求めずに、天国の力を人々の前に現され、主なる神が人々を愛しておられることを示されたのでした。

人々の心に住んでいた悪魔、ここでは悪霊と書かれていますが、悪魔は人間よりすぐれた能力を持っていました。主イエスの教えを、天国の力を人間が受け入れる前に、人々を墮落させる道へ歩ませるため、その力を誤って人間にもたらせることが出来ました。主イエスはそれをよくご存知であり、悪霊にものをいうことをお許しにならなかったのです。悪魔の恐ろしさを改めて感じさせられる場面です。悪魔は目に見えず、人と協力して打ち伏せることも出来ず、ただ自分自身との戦いを通してしか勝利をおさめることが出来ません。

人々の心の中に、主イエスへの信頼とは異なった思いが芽生えてきたのも事実でした。人々の中には、主イエスが望んだように、天国の力を見ることによって主なる神を求める心を起こした人ばかりがいたのではなく、面白いものを見たい、珍しいものを見たい、こうした思いで主イエスについてきた人もいたのです。こうした人々は主イエスに常に付きまとい、主イエスは休むいとまもないぐらいの状況になってしまいました。

しかし主イエスは祈りの時を決してなくしはしませんでした。人里離れたところへ行って、必ず祈りをささげられたのです。主イエスの宣教は、祈りという主なる神との対話、この大切なひとときを通して繰り広げられていったのです。

祈りを静かにささげている主イエスのところへ人々は押しかけてきました。主イエスはこの様子をご覧になり、ガリラヤ全地方へ天国を宣べ伝える決心をなさいました。本日の福音書には短く、ガリラヤ中の会堂に行き、と書かれているのみですが、交通機関も何もなかった当時のこと、少なく見ても数ヶ月はかかった宣教旅行だったであらうでしょう。町々を次から次へと旅をしながら伝え歩いた日々でありました。

祈りをささげながら天国を宣べ伝えられた主イエスの姿を思いますとき、私たちの信仰生活を振り返られます。私たちは日々の生活の中で祈りを大切にしているでしょうか。今もなおこの世界に働かれる主なる神への信頼を日々増し加えているでしょうか。いただいた恵みに対し、行動を持って感謝を現しているでしょうか。カファルナウムの町での出来事に思いを馳せながら、しばらく黙想を試してみたいと思います。